

公益財団法人8020推進財団

平成26年度 歯科保健活動助成交付事業報告書抄録

1. 事業名：「食」と「健康」にかかわる多職種連携・協働による食育推進事業（その2）小学生への味覚教育の取り組み

2. 申請者：一般社団法人 甲府市歯科医師会

3. 実施組織：一般社団法人甲府市歯科医師会 甲府市役所健康衛生課 山梨県栄養士会 山梨県調理師会 山梨県歯科衛生士会 中北保健所 山梨学院短期大学食物栄養科 新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食・嚥下リハビリテーション学 ムカイ口腔機能研究所 千塚小学校 北新小学校

4. 事業の概要：平成22年に日本歯科医師会と日本栄養士会は、「健康づくりのための食育推進共同宣言」で、ライフステージに合わせた食育の推進が重要であることを宣言した。子どもの好き嫌いや味覚の発達は幼児、小学生のうちに発現する。フランスの味覚教育では、小学生に子どもたちの感覚（味覚）を言語表現によって引き出すことにより、味覚が鋭敏になり、その鋭敏になった味覚が言語表現をより豊かにするという、感覚と言語との相乗効果を目指すことを一つの柱としている。今回の事業では、幼児期には難しかった言語表現による味覚（五感）教育の展開を、小学生を対象に行い、食事をする際に、まず見て楽しみ、香りを味わい、陶器や漆器などを唇に触れ、それからしっかりと噛んで風味を味わい、噛みごたえのある物性の食べ物を咀嚼する音を楽しむことの重要性を教育すると同時に、日本の子どもが五感で感じた表現しやすい言語を探索し、整理してみた。

5. 事業の内容：1. **食育推進運営協議会**：多職種（歯科医師会・歯科衛生士会・栄養士会・調理師会）の連携・協働のために、健康づくりのための食育推進に対する意思の疎通を図るとともに、過去4年間の幼児期における味覚教育の効果・反省点を基に、新たに小学生に対する味覚教育の実施内容・回数等を検討した。2. 小学生に対する食べ方・噛み方など食習慣等に関する**調査**：味覚教育の前後に、小学生とその保護者に対し食習慣等に関するアンケートを行い、小学生とその保護者の「食」と「健康」に関わる実態と意識を分析検討する。（途中）3. **味覚教育の実践**：小学生を対象に、しっかりと噛んで、おいしく、楽しく食べる観点からの効果的な味覚（五感）教育を試行、実践した。特に幼児期には難しかった、言語表現による味覚（五感）教育の展開を図り、モデル事業として展開した。（途中）

6. 実施後の評価（今後の課題）：平成26年9月に北新小学校3年生（20名）に味覚教育を行った。始めに食材（ごまわかめ）を食べて言語表現させた後、座学（五感）、グミを用い風味を体験させ、グミで言語表現の練習をさせた。指導後、再び、同じ食材を食べさせて言語表現させた。その結果指導前の語彙数53語から、指導後は151語と98語数増加した。また味覚以外（嗅覚・視覚・聴覚・触覚）の表現は指導前40%から指導後68%に増加した。平成26年10月には千塚小学校3年1組（33名）、2組（31名）に同様の味覚教育を行った。その結果、語彙数は236語から380語と144語数増加した。味覚以外の表現は指導前後で28%から56%となった。両校共に指導前は、味覚の表現の割合が多かったが、指導後は、嗅覚・視覚・聴覚・触覚の語彙数が増加し、五感を使って食べる意味が理解できたと思われる。平成26年11月に千塚小第2回目（給食の食材利用）を行った。座学（五感）と、言語の例の資料を配布後、給食の食材で言語表現をさせた。平成27年1月に第3回、2月に第4回の味覚教育を行った。地産地消を説明し、地産地消の例として、地元産（山梨）の大塚人参と普通の人参の食べ比べを行った。第3回では、遮断なしで2種の人参を食べ比べ、その後に視覚遮断で2種の人参を食べ比べて判別させた。正解率は85%となった。第4回では2種の人参を遮断なしで食べながら、言語表現をして他者（保護者）へ特徴・違いを説明させた。その後に視覚遮断で2種の人参を食べ比べて判別させた。正解率は94%となった。言語表現を行うために五感をより意識した結果、2種の人参の特徴を感じ取る事が出来た為正解率が上がったと思われる。なお、千塚小での味覚教育は1年間継続することを予定している。

